

平成28（2016）年度 学位申請論文要旨

# 初期無量寿経の総合的研究

仏教学専攻  
壬生 泰紀

本論文は以下の通りの構成である。

## 【目次】

### 凡例および略号一覧

### 序章

- 第1節 はじめに
- 第2節 本研究の目的
- 第3節 先行研究概観
- 第4節 本研究の方法
- 第5節 本研究の構成

## 第1章 〈初期無量寿経〉の基礎的研究

- 第1節 〈無量寿経〉の現存資料
  - 第1項 漢訳
  - 第2項 サンスクリット本
  - 第3項 チベット訳
  - 第4項 その他
  - 第5項 まとめ
- 第2節 〈阿弥陀経〉の現存資料
  - 第1項 漢訳
  - 第2項 サンスクリット本
  - 第3項 チベット訳
  - 第4項 その他
  - 第5項 まとめ
- 第3節 〈初期無量寿経〉について
  - 第1項 〈初期無量寿経〉の想定方法
  - 第2項 〈初期無量寿経〉の構成
- 第4節 小結

## 第2章 〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観

- 第1節 問題の所在
- 第2節 阿弥陀仏の徳性

- 第1項 光明
- 第2項 寿命
- 第3項 名号
- 第4項 まとめ
- 第3節 法蔵菩薩の誓願に見られる光明と名号
- 第4節 光明と名号による衆生救済
- 第5節 「阿弥陀仏国土の顕現」に見られる衆生救済
- 第6節 『無量寿経』以降の展開
- 第7節 小結

### 第3章 〈初期無量寿経〉の往生思想

- 第1節 問題の所在
- 第2節 〈初期無量寿経〉の善男子・善女人の定義
- 第3節 「生因願」に見られる善男子・善女人
- 第4節 「三輩段」に見られる善男子・善女人
- 第5節 「光明讃歎」に見られる善男子・善女人
- 第6節 願生者としての善男子・善女人
- 第7節 疑念を懐く願生者の往生
- 第8節 疑念の除去
- 第9節 残りの「生因願」について
- 第10節 小結

### 第4章 〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏国土観

- 第1節 問題の所在
- 第2節 〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉所説の用例
  - 第1項 〈無量寿経〉
  - 第2項 〈阿弥陀経〉
  - 第3項 用例の検討
- 第3節 〈無量寿経〉所説の Sukhāvātī
  - 第1項 現在西方
  - 第2項 Sukhāvātī と呼ばれる所以
  - 第3項 聞信偈
- 第4節 〈無量寿経〉の題名：Sukhāvātīvyūha

- 第5節 〈初期無量寿経〉の古層部分の用例
- 第6節 〈阿弥陀経〉との関係
- 第7節 小結

## 第5章 〈無量寿経〉と〈悲華経〉

- 第1節 〈悲華経〉について
- 第2節 〈無量寿経〉と〈悲華経〉をめぐる研究史
- 第3節 阿弥陀三尊観の変遷
  - 第1項 問題の所在
  - 第2項 〈無量寿経〉所説の阿弥陀三尊観
  - 第3項 〈悲華経〉所説の阿弥陀三尊観
  - 第4項 まとめ
- 第4節 釈尊観の変遷
  - 第1項 問題の所在
  - 第2項 〈無量寿経〉所説の釈尊観
  - 第3項 〈悲華経〉所説の釈尊観
  - 第4項 まとめ
- 第5節 小結

## 第6章 〈初期無量寿経〉の形成過程

- 第1節 問題の所在
- 第2節 『大阿弥陀経』の構成要素
  - 第1項 『大阿弥陀経』と〈阿弥陀経〉との構成比較
  - 第2項 『大阿弥陀経』の構成要素
- 第3節 往生思想
- 第4節 阿弥陀仏の徳性
- 第5節 〈無量寿経〉の題名
- 第6節 「三毒・五悪段」の問題
- 第7節 小結

## 第7章 〈初期無量寿経〉とガンダーラ仏教美術

- 第1節 阿弥陀信仰と北西インド
- 第2節 ガンダーラ仏教美術の諸相

- 第1項 仏三尊像
- 第2項 複合型浮彫
- 第3項 まとめ

### 第3節 仏三尊像（リングリング美術館蔵）

- 第1項 研究史概観
- 第2項 問題の所在
- 第3項 amṛta / amata について
- 第4項 〈無量寿経〉所説の阿弥陀三尊形式
- 第5項 〈初期無量寿経〉所説の阿弥陀仏と Amṛtābha
- 第6項 大勢至菩薩とブラフマー
- 第7項 まとめ

### 第4節 複合型浮彫（ラホール博物館蔵）

- 第1項 研究史概観
- 第2項 問題の所在
- 第3項 〈初期無量寿経〉所説の「阿弥陀仏国土の顕現」
- 第4項 「阿弥陀仏国土の顕現」の図像化の背景
- 第5項 「阿弥陀仏国土」説で問題となる図像
- 第6項 まとめ

### 第5節 小結

## 終章

- 第1節 各章の総括
- 第2節 〈初期無量寿経〉
- 第3節 今後の課題と展望

## Appendix I : 阿弥陀仏の光明と寿命

## Appendix II : 図版一覧

## 参考文献一覧

## 初出一覧

## 本研究の目的

本研究は、阿弥陀信仰に言及する大乘経典である〈無量寿経〉の初期の姿、すなわち「初期無量寿経」の全貌を明らかにしようとするものである。本研究のいう「初期無量寿経」とは、具体的には〈無量寿経〉の最初期の漢訳である『大阿弥陀経』の原本に相当するものを指し、地域的にはインドで成立し、中期インド語で流布していたものに当たる。しかし、『大阿弥陀経』の原本は現存していない。〈無量寿経〉の現存する完本は『大阿弥陀経』、『平等覚経』、『無量寿経』、『無量寿如来会』、『莊嚴経』の漢訳 5 本とサンスクリット本とチベット訳である。そこで「初期無量寿経」を想定するに当たり、本研究では『大阿弥陀経』を中心テキストとし、『平等覚経』をその補助テキストとし、そして適宜サンスクリット本を参照するという方法を採用した。以上の文献学方法により想定されたものを〈初期無量寿経〉と名付け、本研究では仮定的に用いることとした。

さて、〈無量寿経〉研究に関していえば、この分野の金字塔である藤田宏達氏の『原始浄土思想の研究』（岩波書店）が 1970 年に刊行された。本書の登場により、浄土思想の原初形態が推定されるとともに、それがインド仏教思想史上に位置付けられることが証明されることとなった。この藤田氏の研究成果が当時の仏教学の進展に果たした役割は甚大であったといえる。しかし、『原始浄土思想の研究』の刊行以降、半世紀近くの間には〈無量寿経〉研究を取り巻く環境は大きく変化した。6 世紀～7 世紀頃のものとするサンスクリット語の〈無量寿経〉写本の断片や新種の漢訳断片といった新資料の出現、これまで読解困難とされてきた〈無量寿経〉の最古訳『大阿弥陀経』に対する辛嶋静志氏による一連の訳注研究、そして、藤田氏によるサンスクリット語の〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉のクリティカル・エディションおよび翻訳の刊行など、いま〈無量寿経〉研究は過渡期にあるといえる。

ところで、ここ数年、仏教研究において文献資料と図像資料とを総合的に扱った研究の必要性が謳われている。〈無量寿経〉研究においてもその例外ではない。たとえば、阿弥陀仏の名前を含んだ文章が刻み込まれた、両足のみを残す台座がマトゥラーより出土している。この作品は紀元後 2 世紀のものとして、〈無量寿経〉の成立地を考える上で重要な資料となり得る。また仏教美術で有名な地ガンダーラにおいても阿弥陀信仰を表したと考えられる図像が出土している。それはリングリング美術館所蔵の仏三尊像とラホール博物館所蔵の仏説法図（モハマッド・ナリー出土）である。これらはともに 3 世紀～4 世紀の作品とされ、『大阿

弥陀経』や『平等覚経』と成立年代が近い。この2作品が果たして阿弥陀信仰あるいは〈無量寿経〉をモチーフとしたものか否かについては古くより議論され続けており、いまだ解決していない。これらの問題の解決は、〈無量寿経〉の研究のみならず、図像学の方面にも資するものである。そのためには図像学の側からだけでなく、文献学の側からのアプローチが必須である。そこで本研究では、上記で示した文献学的方法に加えて図像資料も視野に入れた、〈初期無量寿経〉の総合的研究を試みた。

以上のような学界の現状において、〈無量寿経〉の研究をおこなうことは大いに意義があると思われる。その中でも、特に〈初期無量寿経〉の研究は急務である。〈初期無量寿経〉の研究は、浄土宗や浄土真宗において所依の経典とされる『無量寿経』よりも前の阿弥陀信仰の様相を明らかにするのにとどまらず、延いては初期大乘経典研究において貴重な事例を提示することになる。またインド仏教美術における阿弥陀信仰の受容をうかがう面でも重要となる。そのため、本研究の成果は浄土学・真宗学、大乘経典研究、インド仏教美術研究の発展の一助になるものといえよう。

これまでに〈初期無量寿経〉に関わる研究には膨大な数の蓄積があり、種々の成果が公表されている。ただ、それでも、先行研究の問題点や、まだ十分に検討されていない内容などがあり、課題が残されている。それらを箇条書きにすると以下の通りである。

- ① 〈初期無量寿経〉の想定方法
- ② 〈初期無量寿経〉の思想体系
- ③ 〈初期無量寿経〉と他の大乘経典との関係
- ④ 〈初期無量寿経〉の形成過程
- ⑤ ガンダーラ仏教美術における〈初期無量寿経〉の受容

これらの課題を各章で取り上げた。本研究の第1章では〈初期無量寿経〉の想定方法の見直しをおこなった(①)。続く第2章から第4章にかけては〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観、往生思想、阿弥陀仏国土観を体系的に把握することに努めた(②)。第5章では他の大乘経典として〈悲華経〉に注目し、〈初期無量寿経〉との思想的影響関係について、後代の〈無量寿経〉も視野に入れて、検討した(③)。第6章では〈初期無量寿経〉の形成過程の解明を試みた(④)。第7章ではガンダーラ仏教美術における〈初期無量寿経〉の受容の有無を検討した(⑤)。

## 第1章 〈初期無量寿経〉の基礎的研究

第1章では〈初期無量寿経〉の基礎的研究をおこなった。まず〈初期無量寿経〉を研究するにあたって必要となるテキストの情報を整理した。そして、本研究で扱うところの〈初期無量寿経〉を想定する方法を明示し、その上で、〈初期無量寿経〉の構成を確認した。具体的には、まず第1節では〈無量寿経〉の現存する諸資料を整理した。第2節では、〈無量寿経〉と同じく阿弥陀信仰を主題とする〈阿弥陀経〉の現存資料を確認した。この両経典の資料整理についてはすでに藤田宏達氏によってなされているが、それ以降の最新の資料や同氏が取り上げなかった資料を新たに加えて紹介した。そして、第3節では、筆者が考える〈初期無量寿経〉の想定方法を明示した。これには異論もあると思われるので、それを踏まえた上で、本研究で採る方法の妥当性を示した。

以上の結果、現存資料としては『大阿弥陀経』が〈初期無量寿経〉を想定するテキストとして最適であり、それに『平等覚経』を随時比較することで、より精密な想定が可能となることを述べた。また両経典の構成を比較した上で、『大阿弥陀経』をもって〈初期無量寿経〉の構成を想定することに概ね問題がないことを確認した。以上をもって、その後続く各章で論じていくに当たっての基礎を築いた。

## 第2章 〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観

第2章は〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観について論じた。〈初期無量寿経〉では阿弥陀仏の光明と名号は衆生救済を説く文脈においてたびたび現れる。そこで、その光明と名号を手掛かりとして、〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観、具体的には、その徳性と救済仏としての様相を探った。まず第1節で問題の所在を示した。第2節では、阿弥陀仏の徳性について以前より指摘されている光明と寿命に加え、名号に関する記述に着目し、その様相を検討した。第3節から第5節にかけては阿弥陀仏による救済における光明と名号のはたらきを取り上げて、〈初期無量寿経〉の救済論を確認した。最後に、第6節では後代の〈無量寿経〉に見られる阿弥陀仏観を確認し、〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観がどのような展開を遂げたのかを概観した。

その結果、以下のことが明らかとなった。〈初期無量寿経〉においては、光明



と名号が法蔵菩薩の誓願の中核として位置付けられていた。阿弥陀仏の光明は積極的に衆生にはたらきかけ、また、かの仏に関する教説を内包する名号は、そのはたらきを諸仏国土に知らしめる役割を担っていることが分かった。そして、光明と名号との有機的はたらきによって衆生を救済することがうかがえた。具体的にいうと、まず諸仏が阿弥陀仏の名号を称讃・讃歎することで、衆生はかの仏の存在を知る。そして、阿弥陀仏を見たいと願うものたちは、かの仏への讃歎・帰依をすることで、阿弥陀仏より光明が放たれ、その光明によってかれらには種々の利益がもたらされる。また、阿弥陀仏に関する教説を聞いて、その存在を確信したものたちは、かの仏を称讃し、最終的に阿弥陀仏の国土に生まれるのである。以上のような光明と名号のはたらきによって衆生を救済するという阿弥陀仏観が〈初期無量寿経〉から確認できた。

### 第3章 〈初期無量寿経〉の往生思想

第3章では、前章で明らかとなった阿弥陀仏の徳性とその救済の構造を踏まえ、〈初期無量寿経〉の往生思想を検討した。それに当たって、これまで往生思想を論じる際にあまり注目されてこなかった「善男子・善女人」を手掛かりに考察した。また往生と疑念の有無との関係性についても確認した。第1節では問題の所在を明らかにし、次節より〈初期無量寿経〉に見られる善男子・善女人の用例を検討した。まず第2節では「善男子・善女人の定義」を確認し、第3節と第4節では往生の方法が示される、いわゆる「生因願」と「三輩段」の用例に、第5節では「光明讃歎」の用例に検討を加えた。そして、第6節では善男子・善女人が主たる願生者であることを論証した。第7節と第8節では善男子・善女人の定義から外れる疑念を懐くものがどのようにして往生するのかを、疑念に関する記述を手掛かりに考究した。最後に、善男子・善女人の用例が見られない「生因願」についても言及した。

その結論は次の通りである。〈初期無量寿経〉における主たる願生者とは、善男子・善女人であり、かれらは阿弥陀仏に関する教説に対して疑念を懐かずに信受するものであった。その善男子・善女人は阿弥陀仏の光明と名号のはたらきと、自身に見合った善行によって往生するのである。また、善男子・善女人に該当しない、阿弥陀仏に関する教説に疑念を懐くものにおいても、阿弥陀仏の光明と名号のはたらきが重要となる。つまり、名号によって阿弥陀仏の存在を知らされた

ものたちは、たとえそれを疑いつつ往生のために善行をおこなったとしても、光明によってその疑念が取り除かれ、最終的に往生するのである。〈初期無量寿経〉には以上のような往生思想がうかがえることを指摘した。

## 第4章 〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏国土観

第4章は〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏国土観について論じた。〈無量寿経〉の阿弥陀仏国土観については一定の成果が公表されている。しかし、〈初期無量寿経〉を読み進めていくと、従来、指摘されているものとは異なった内容が姿を現す。そこで、この章では、〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏国土観について、それを指し示す名称の変遷を手掛かりに再検討した。第1節では問題の所在を確認し、第2節では実際に〈無量寿経〉と〈阿弥陀経〉に見られる阿弥陀仏国土を指し示す名称の用例を検討した。第3節と第4節では、現在、一般に知られる「Sukhāvātī（極楽）」という阿弥陀仏国土の名称が〈無量寿経〉内で、どのような変遷を経て定着したのかを国土の描写や経典自体の題名に焦点を当てて検証した。第5節は〈初期無量寿経〉の古層と考えられる部分に見られる阿弥陀仏国土を指し示す用例をもとに最初期の阿弥陀信仰における阿弥陀仏国土観を考究した。そして最後の第6節で、それまで論証してきた結果の傍証として〈阿弥陀経〉の用例を確認し、〈無量寿経〉と比較した。

その結果、〈無量寿経〉の展開において、阿弥陀仏国土観は以下のような変遷を辿ることができる。〈初期無量寿経〉では、阿弥陀仏国土は、Sukhāvātī という名称は定着しておらず、単に「阿弥陀仏の国土 (\*Amitābhasya buddhakṣetra)」と把握され、教説自体も *Amitābhavyūha* という題名で伝承されていたと考えられる。それが後代になると、Sukhāvātī に関する記述が加わり、阿弥陀仏の国土 = Sukhāvātī という意識が定着していき、教説の題名として *Sukhāvātīvyūha* が採用されたのであろう。そして〈阿弥陀経〉の阿弥陀仏国土観は〈初期無量寿経〉以降に位置付けられる。これにより、〈初期無量寿経〉において阿弥陀仏の国土は一般に理解されているような安楽で満ちあふれた世界と看做されていなかったことが分かった。

## 第5章 〈無量寿経〉と〈悲華経〉

第5章では〈無量寿経〉と〈悲華経〉の思想的交渉について確認した。〈悲華経〉はその主題を釈尊の穢土成仏に置く。それと対比する形式で阿弥陀仏などの浄土を選び取った仏・菩薩の物語が説かれる。それは明らかに〈無量寿経〉の内容を下敷きとして描かれたものである。それゆえ、従来、阿弥陀仏の徳性や誓願を中心に比較がなされてきた。また近年では〈無量寿経〉の思想的展開史の中に〈悲華経〉を積極的に位置付けようとする研究も出てきた。そのような研究状況を承けて、本章では、〈無量寿経〉と〈悲華経〉の間に見られる思想的影響関係の解明を試みた。その手順は次の通りである。第1節や第2節で〈悲華経〉の基礎的な情報や先行研究の成果を概観した。そして、第3節では、阿弥陀・観世音・大勢至の阿弥陀三尊観に注目し、〈無量寿経〉と〈悲華経〉の思想的影響関係を探った。第4節では両経典の釈尊観に焦点を当てて、両者の間の思想的な交渉について考究した。

その結果、次のことが指摘できる。すでに注目されているように、〈初期無量寿経〉に見られる阿弥陀・観世音・大勢至の3者による法の継承という関係性が〈悲華経〉に踏襲されている。それに加えて、〈初期無量寿経〉には見られない観世音・大勢至への理解が〈悲華経〉と後代の〈無量寿経〉に共通して確認されることを指摘した。また、〈初期無量寿経〉に見られる釈尊を高く評価する態度は釈尊の穢土成仏を主題とする〈悲華経〉の成立にいくぶんかの影響を与えたことが想定される。一方で、後代の〈無量寿経〉では、〈初期無量寿経〉のような釈尊観はうかがえず、釈尊を規範とする菩薩を阿弥陀仏国土の例外的菩薩とするのである。その背景には〈悲華経〉所説の釈尊観による影響が見られることを指摘した。これらのことから、〈初期無量寿経〉は、〈悲華経〉との思想的交渉を経ながら、後代の〈無量寿経〉へと展開していったことが明らかとなった。

## 第6章 〈初期無量寿経〉の形成過程

第6章では、第2章から第5章までの考察の成果をもとに、〈初期無量寿経〉の形成過程の解明を試みた。〈初期無量寿経〉の構成要素を明らかにし、そして、往生思想、阿弥陀仏の徳性、〈無量寿経〉の題名を手掛かりに、その構成要素の新層・古層を探った。そして最後に、従来、撰述問題のある「三毒・五悪段」に

触れ、〈初期無量寿経〉にその核となる内容が存在していた可能性の提示を試みた。以上をもって、〈初期無量寿経〉がどのような形成過程を経て成立したのかを論証した。まず第1節では最古訳である『大阿弥陀経』の形成過程に関する先行研究の整理とその問題点を確認した。第2節は〈初期無量寿経〉の構成要素を明らかにするために、〈阿弥陀経〉との比較を通して『大阿弥陀経』の構成の把握を試みた。第3節と第4節においては、前節で明らかにした各構成要素に見られる往生思想と阿弥陀仏の徳性に注目し、その相違から新層と古層を判断した。第5節では〈無量寿経〉の題名と考えられる *Sukhāvāṭīvyūha* や *Amitābhavyūha* と各構成要素との対応関係から新層と古層を検討した。最後に、第6節では〈初期無量寿経〉に「三毒・五悪段」の核となる内容があった可能性を〈阿弥陀経〉や〈悲華経〉を手掛かりにして論証した。

これによって以下のことが明らかとなった。『大阿弥陀経』は、『阿弥陀経』と構造の比較をした結果、「仏身の教説」と「仏土の教説」という2つの構成要素からなることを指摘した。この2つの間には、往生思想、阿弥陀仏の徳性について差異が確認できた。「仏身の教説」には阿弥陀仏に対して疑念を懐くものの存在が想定されておらず、また阿弥陀仏の主たる徳性である光明に関する内容が豊富に説かれる。一方の「仏土の教説」には、疑念を懐くものが想定されており、そのものの往生についても説示される。そして、阿弥陀仏の徳性として2次的にはあるが寿命が加わり、光明には疑念を取り除くはたらきが付与される。さらに「仏身の教説」は阿弥陀仏に関する内容が多く、〈無量寿経〉の本来の題名と考えられる *Amitābhavyūha* とよく合う。そして、〈無量寿経〉の成立を考察する上でたびたび問題とされる「三毒・五悪段」については、その全体がインドで成立したと見ることは困難であるが、そこに説かれる釈尊の穢土成仏を評価する内容についてはインドにその成立が求められることを指摘した。以上のことから、「仏身の教説」が先に成立し、それをもとに後から「仏土の教説」が順次増広された、という〈初期無量寿経〉の形成過程を提示した。そして、このような増広の背景として阿弥陀仏の教説に対して疑念を懐くものの存在があったことを述べた。

## 第7章 〈初期無量寿経〉とガンダーラ仏教美術

第7章では〈初期無量寿経〉とガンダーラ仏教美術との関連を中心に論じた。近年、仏教研究において文献学と図像学との交渉の重要性が指摘されている。〈無

量寿経〉も例外ではない。リングリング美術館所蔵の仏三尊像とラホール博物館所蔵の仏説法図（モハマッド・ナリー出土）は、長年、その主題が何であったかが議論され続けている。本章ではこれらの解明を試みた。まず第1節で、阿弥陀信仰と北西インドとの関連性を確認した。そして、第2節ではガンダーラ仏教美術の仏三尊像と複合型の浮彫について概観した。第3節において、リングリング美術館所蔵の仏三尊像の台座に刻まれた尊名“Amridaa”と〈初期無量寿経〉所説の阿弥陀仏に関する描写との比較をおこない、その尊名が〈初期無量寿経〉の内容を反映したものであることを論証した。また、第4節では、〈初期無量寿経〉の記述を手掛かりとして、ラホール博物館所蔵のモハマッド・ナリー出土仏説法図が〈無量寿経〉に見られる「阿弥陀仏国土の顕現」をモチーフとした可能性を検討した。

その結論は以下の通りである。リングリング美術館所蔵の仏三尊像の碑文に見られる Amridaa のサンスクリット語形である Amṛtābha の前分 amṛta-は「涅槃」を意味するものといえる。そして、Amridaa (Amṛtābha) とは、Amitābha (中期インド語：Amitaha / \*Amidaha) という仏の名前が、〈初期無量寿経〉に説かれていたであろう、かの仏の徳性である光明によって衆生が涅槃を獲得するという教説に結び付けられたことにより名付けられた尊名である、と推察される。よって、当該の仏三尊像は〈初期無量寿経〉で説示されるような阿弥陀仏と、その脇侍である観世音と大勢至の二菩薩をモチーフにした可能性が高いことを指摘した。一方のラホール博物館所蔵の仏説法図は、釈尊が阿難に視覚でもって阿弥陀仏の実在性を証明する「阿弥陀仏国土の顕現」の場面を図像化したものである可能性が高い。その背景として、〈無量寿経〉の展開において、その初期に見られる視覚的側面が教説の図像化の萌芽となって、それに適した「阿弥陀仏国土の顕現」の場面が浮彫のモチーフとして採用されたことが考えられる。以上の結果から、少なくとも3世紀～4世紀頃のガンダーラには、〈初期無量寿経〉の教説に基づく阿弥陀信仰が存在しており、その対象となる尊格やその国土を図像化しようとする動きがあったことが考古学的に確認できた。

なお、本研究において必要となる資料を2種類補遺として付けた。Appendix I は〈無量寿経〉と〈阿弥陀経〉に見られる阿弥陀仏の光明と寿命の記述を整理し、若干の検討を加えたものである。Appendix II は、本研究の第7章で言及する図像作品の図版一覧である。

## 終章

各章の考察結果を総合して〈初期無量寿経〉の全容に迫ってみたい。

〈初期無量寿経〉は、阿弥陀仏について説く「仏身の教説」と、その仏国土を中心に説示する「仏土の教説」の 2 つの構成要素からなる。「仏身の教説」の方が古層であり、*Amitābhavyūha* という題名で伝承されていたと考えられる。そこでは阿弥陀仏の主たる徳性である光明について豊富に説かれ、また阿弥陀仏に関する教説に対して疑念を懐くものを想定していない。しかし、次第にこの教説が流布していくに当たり、阿弥陀仏に関する教説に対して疑念を懐くものが現れたと推測される。そこで、「仏身の教説」に見られる法蔵菩薩の誓願が完成したことが求められ、仏国土の描写や往生の方法を述べる「仏土の教説」が増広されていったのであろう。また阿弥陀仏の光明には疑念を取り除くはたらきが新たに付加されるようになる。

以上のような過程を経て形成された〈初期無量寿経〉において、阿弥陀仏は光明と名号によって衆生を救済する仏として説示される。阿弥陀仏の名号を諸仏が称讃・讃歎することで、衆生はかの仏の存在を知る。それを聞いて疑念を懐かず信受する善男子・善女人と呼ばれるものたちは、阿弥陀仏国土に生まれることを願い、かの仏を称讃し、自身に見合った善行をおこない、最終的に阿弥陀仏の国土に生まれるのである。一方で、阿弥陀仏に関する教説に対して疑念を懐くものたちも往生が可能であるとする。それは、名号によって阿弥陀仏の存在を知らされたものたちが、たとえそれを疑いつつ往生のために善行をおこなったとしても、光明によってかれらの疑念を取り除き、最終的に往生させるというものである。そして、かれらが生まれる阿弥陀仏の国土は、安楽に満ちあふれた世界ではなく、やがて仏となるための仏道修行に適した場所なのである。

〈初期無量寿経〉は以上のような阿弥陀仏による救済を主題とする。しかしながら、阿弥陀仏だけでなく、穢土で成仏した釈尊についても高く評価するのである。阿弥陀仏の救済と釈尊の穢土成仏を説く〈初期無量寿経〉の存在は、〈悲華経〉の誕生の契機になったと考えられる。そうして成立した〈悲華経〉は、阿弥陀仏のような浄土を選び取った仏・菩薩たちに批判的な態度を示し、穢土を選び取って仏となった釈尊の大悲を謳う。ただ、それは決して一方的な影響関係であったのではなく、〈悲華経〉もまた〈初期無量寿経〉の展開に思想的影響を及ぼしたことが推測される。阿弥陀仏のように浄土を選び取るものを低く位置付け、釈尊の穢土成仏を再評価する〈悲華経〉の存在は、〈無量寿経〉の展開において、

阿弥陀仏の独自性を加速させ、釈尊を評価する内容を縮小させ、釈尊のような濁世を選び取る菩薩を阿弥陀仏国土の例外的菩薩として採用させたと考えられる。時をほぼ同じくして、〈初期無量寿経〉の教説に基づく阿弥陀信仰は、ガンダーラにおいて図像化されていく。阿弥陀・観世音・大勢至の阿弥陀三尊形式は、図像的には釈迦三尊像の表現を踏襲しつつ、造形される。また、〈初期無量寿経〉の教説の中で特徴的な場面である「阿弥陀仏国土の顕現」は複合型の浮彫として表される。このような背景には、〈初期無量寿経〉に説かれる阿弥陀仏やその国土を顕現させて衆生が実際に目の当たりにすることで、疑念を懐かせずに信受させるという教説の視覚化の傾向があったと考えられる。

以上が本研究によって明らかとなった〈初期無量寿経〉の成立・思想・展開に関するすべてである。

最後に今後の展望と課題と述べておきたい。

〈無量寿経〉の最古訳である『大阿弥陀経』が初期大乘経典（あるいは原始大乘経典）と位置付けられて久しい。したがって、〈初期無量寿経〉も自ずと初期の大乘経典と看做される。

本研究において〈初期無量寿経〉の形成過程を究明したことで、初期大乘経典の形成を考える上での1例を提示できたと思う。今後は、現在、成果として挙げられている他の大乘経典の形成過程と照らし合わせて、共通点や相違点を見出していく必要があるだろう。

また、〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観、往生思想、阿弥陀仏国土観については、当然のことながら、後代の〈無量寿経〉へとどのような思想的展開を見せたのかを明らかにしなければならない。その一方で、それらの思想と他の大乘経典と関連性についても目を向ける必要がある。たとえば、梶山雄一氏は『大阿弥陀経』所説の阿弥陀仏の光明と名号による衆生の救済を大乘経典にたびたび見られる神変の萌芽的思想として位置付ける（「神変としての浄土教」『仏教』29, pp. 204-224 1994年；「神変」『佛教大学総合研究所紀要』2, pp. 1-37, 1995年）。本研究で具体的に提示した阿弥陀仏の光明と名号のはたらきの教説構造をもとに、神変思想との関連性をうかがっていくことが求められる。また、〈初期無量寿経〉の往生思想において主たる願生者とされている善男子・善女人は他の大乘経典にも登場する。それらと比較していくことで、より普遍的な善男子・善女人像が描き出せるであろう。そして、阿弥陀仏国土観についていえば、本研究での検討の結果、〈初期無量寿経〉と後代の〈無量寿経〉とでは明らかな相違が見られた。この結果は、これまでのサンスクリット本を中心とした他文献との比較によって指摘された国土観の共通点や相違点の見直しを迫るものといえる。再構築した〈初期無量寿経〉

の阿弥陀仏国土観をもとに他文献と比較していく作業が、今後、必要となる。

本研究では〈悲華経〉を取り上げて〈無量寿経〉との思想的交渉を検討した。これまで〈悲華経〉は〈無量寿経〉や〈阿閼仏国経〉を前提として成立したものと理解されてきたため、それら先行する経典が〈悲華経〉に与えた影響にのみ目が向けられてきた。しかし、本研究で明らかにしたように〈悲華経〉の側も〈無量寿経〉の思想的展開に影響を与えたと考えられる。今後は、〈無量寿経〉に加え、〈阿閼仏国経〉などの思想的展開や、さらには〈阿弥陀経〉の成立において〈悲華経〉が与えた影響についても検討していかなければならない。そして最後に、〈初期無量寿経〉を通して、ガンダーラ仏教美術における阿弥陀信仰の受容を見ていったのだが、本研究で取り上げた2作品以外にも、阿弥陀仏をモチーフとして作成された可能性のある作品が数点ある。それらの比定をおこなっていく必要がある。それによって、ガンダーラにおける阿弥陀信仰の実態が考古学的に明らかになると思われる。

## 初出一覧

本論文は以下の諸論文に加筆、修正をしたものをもとに構成されている。

### 序章 [新稿]

#### 第1章 〈初期無量寿経〉の基礎的研究 [新稿]

#### 第2章 〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏観

- a. 「阿弥陀仏の光明と名号：『大阿弥陀経』を中心として」『龍谷教学』50, 2015年12月31日, pp. 80-104.

#### 第3章 〈初期無量寿経〉の往生思想

- a. 「大阿弥陀経』所説の往生思想：善男子・善女人を手掛かりとして」『仏教学研究』72, 2016年3月10日, pp. (113)-(139).

#### 第4章 〈初期無量寿経〉の阿弥陀仏国土観

- a. 「〈無量寿経〉における阿弥陀仏国土観の変遷：仏国土の名称を中心として」『印度学仏教学研究』61-1, 2012年12月20日, pp. (150)-(153).
- b. 「阿弥陀仏国土の名称について」『龍谷大学佛教学研究室年報』17, 2013年3月31日, pp. (62)-(74).



## 第5章 〈無量寿経〉と〈悲華経〉

- a. 「〈無量寿経〉における釈尊観の変遷: 〈悲華経〉を手掛かりとして」『印度学仏教学研究』65-1, 2016年12月20日, pp. (194)-(199).

## 第6章 〈初期無量寿経〉の形成過程

- a. 「『大阿弥陀経』の構造について: 〈阿弥陀経〉の構造との比較を手掛かりとして」『印度学仏教学研究』62-1, pp. (157)-(160).
- b. 「『大阿弥陀経』の形成過程」『慈光法喜 武田龍精博士喜寿記念論集』(法喜会編), 2017年4月20日, pp. 263-298.

## 第7章 〈初期無量寿経〉とガンダーラ仏教美術

- a. 「ガンダーラ仏三尊像にみられる尊名: 『大阿弥陀経』所説の阿弥陀仏との関連について」『印度学仏教学研究』63-1, 2014年12月20日, pp. (175)-(179).
- b. 「モハマッド・ナリー出土仏説法図と『大阿弥陀経』」『印度学仏教学研究』64-1, 2015年12月20日, pp. (159)-(163).

## 終章 [新稿]